

週日の説教

金 大烈 神父 2010年11月26日(金)

《隣人への心配り》

主の平和

1998年から2000年の2月迄、私が務めたところは5日前に北朝鮮から爆撃されて大変なことになっているヨンピョン島(延坪島)という島です。そのヨンピョン島の事情について少し説明させていただきますと、ヨンピョン島は北朝鮮との境界線に本当に近い所にある島です。そして朝鮮戦争の前には北朝鮮の領土でした。ですから島に住んでいる人々の7割以上は全部、黄海道(ファンヘッド)という北朝鮮から戦争の時に避難してきた人々です。「統一されたら私達はいつでも自分の故郷に帰れる」と希望して住み始め、60年経った今でもその事情は何も変わらずに、昨今のようなとんでもないことが起きる現実を迎えているわけです。

初めのころ、そこでの避難生活は何もなかったのですが、住む家から食べる物、色々なことで困ったそうですが、その島の持ち主だった一人のカトリック信者が全部整えて施し、問題を解決してくれたそうです。そして、その後アメリカから司祭が来てそこから教会が始まりました。その時は住民の100パーセントがカトリック信者だったそうです。私が1998年にその島に行った時には32年間ミサが殆どなく、1年に2、3回陸地から司祭が来てミサを捧げていた様子でした。ヨンピョン島には今は4時間ぐらいで渡れるのですが、私が赴任していた当時はインチョンから船で8時間ぐらいかかりました。少しでも海が荒れて波が激しいと船が動かなかったし、ある時には、島を目のあたりにして天気が悪くなり引き返したこともあります。そのような事情の島なのです。

私が何十年ぶりかにその小教区の司祭として派遣されたのですが、長い間司祭がいなかったため、教会から離れてしまった人が多かったし、信教の(プロテスタント)の教会がカトリックよりも先に入ったので改宗した人々もいました。

その当時の一般住民は1500人ぐらいで、軍人が1600人ぐらいでした。私も3年間それぞれの司牧に一生懸命に頑張りました。私がヨンピョン島を離れる時には80パーセントの人々がカトリック信者に戻りました。振り返ってみますとそこでは本当に幸せな3年間の日々でした。

今日の福音(ルカ 21・29-33)を準備しながら思い浮かんだことは、ヨンピョン島の海は豊かで、土地も肥沃でどんな作物を植えても育つ自然環境的には結構恵まれたところでした。しかし、若者たちはほとんどが陸地に行ってしまう。その親は、陸地に行ってしまった自分の子供たちのために、自分が働いて得たあらゆるものを1割ぐらい自分たちのために残して、9割は子供たちのために全部送ってしまうのです。私はその様子を見て腹を立てました。ですから、子供たちがお正月とか、お盆とか、休暇で島に戻って来た時にしかりました。「あなたたちは親にこんなに働かせて何をしているのか!」と。とにかくお母さんたちは自分たちのためにはそんなに働く必要がなかったのですが、彼女

たちはよく働きます。「もし夜がなかったら 24 時間働かなければならないでしょう。」と冗談で話された一人のお母さんの話を思い出しました。例えば、島には田んぼも畑もあって、一つの農作物の収穫が終わると次の作付けを行い、それが終わるとまた次のものと、その繰り返しなのでそれぞれの作物の収穫に至るまでいつも動かなければならないのです。私が悲しかったのはほとんどの 70 歳を越えているお母さんの腰がみな曲がってしまっていることです。農作業に余裕がある時には海に行って色々な物を獲ります。そして漁船で使う網を整える仕事もします。ヨンピョン島は蟹が一番有名なのですが、海が引き潮の時はその浜辺でバケツを持って蟹を獲るのです。獲ると言うよりはバケツに拾うと言った方がいいくらいに豊かなところですよ。ですから人々が絶対に餓えることはなく、歴史上物乞いする人はいないと言われている島です。

その人々が一日中、一生懸命働いても「お母さん、今日はもう仕事終わったのでしょうか。」と言うと「いいえ、隣の人がまだ終わっていません。」という答えが返ってきます。結局、本当に夜がなかったら 24 時間いつも食べることに寝ること、そして教会に来ること以外は働き詰めの生活です。たとえ自分の一日の仕事が終わったとしても、疲れていても、“隣人が一緒に終わらなければ本当の意味で終わったとは言えません”という意識を持っている人々の生活を 3 年間見てきました。そのように話していたお母さん達の顔を一人一人思い出していましたが、10 年前のことですし、結構沢山の方が亡くなりましたと思います。

今、ヨンピョン島の住民は皆、陸地へ強制的に行かされ、軍人だけが残っています。それを見ながらやはり私達がどんなに疲れても、生きる力が色々なところから与えられると思えました。そして、その中で一つの心配り、隣人のために「私は全てのことを果たして余裕があるけれども、まだ終えなくて焦り苦しんでいる人がいるかもしれない。」といったより広い心配りが私達には必要ではないかと思えます。

私達はある意味で、今まで本能的に自分のことばかり考えながら生きて来たと言えると思えます。それが殆どの人の人間の本能的な、また自然な生き方だと思えます。しかし、福音的な意味で、もっと周りの人々、世界が動く色々なことにも関心を持って、耳を傾けようとする努力が必要ではないかと思えます。これを福音的な感性と言います。私達はこの福音的な感性を持って周りにもっと困っている人がいるのではないかと、私が手を伸ばすのを待っている人がいるのではないかと心を配ることも必要だと思えます。ヨンピョン島のことを思い出して浮かんだのはそういう生き方を見せ下された人々の姿でした。

私が以前からこの共同体のためにもっと意味のあるやりがいのある、そして福音的なことには何かあるかと思って調べていることがあります。そのことについて皆様にあらかじめ申し上げたいと思います。

皆様、里親制度がありますよね。聞いたことがありますか。その里親が出来ないかと考えています。私達の小教区には宣教クララ修道会があります。この修道会が派遣しているシスターたちが貧しい国

で奉獻生活をしていますよね。ご存じのようにこの世界では毎瞬誰かが、餓え死んでしまう子供たちが、沢山いることを私達は知っています。信頼できる宣教クララ修道会を窓口にして、シスターたちが派遣されて頑張っているその国の子供たちに、毎月一定額のお金を送ることが出来ないかと考えています。強制的には絶対出来ないことですので希望の方、今、分かち合うことの出来る方が協力下さればいいと思います。

子供たちを、何の罪もない子供たちを、私達が一人でも多く救うのに役に立てば、イエス様がおっしゃった素晴らしい生き方になるのではないのでしょうか。多くの命が救われることを意識して、皆でこういうことが出来ればむしろ私達の方がより幸せに感じるのではないかと思います。

ありがとうございました。